

# 「正解」のない学びの世界へ



理工学部長  
かざま しげお  
**風間 重雄**

中央大学理工学部は、新入生のみ  
なさんをころより歓迎します。

いま世界のどこでも、政治的、経済的、社会的に出口の見えないトンネルに入ったかのような沈滞したムードが支配しています。世界はふたたび混乱の時代を迎えようとしています。その中であつて日本は、人類史上どの国も経験したことのない事態に直面しています。「少子高齢化社会」です。みなさんが社会の中堅層となる時代の日本のすがたを明るい筆致で描き、そこに希望を語るような政治指導者は見当たりません。私たちのまわりでは、希望ではなく

絶望の声ばかりが聞こえてきます。

しかし私はいま、こういう時代であるからこそ、みなさんに希望を語り、みなさんに人類の未来を託したいと思います。なぜなら、若者にはいつも未来が可能性として大きく開かれていくからです。困難な時代はいつも若者によりあたらしい時代として切り開かれてきたことは歴史の教えるところですよ。みなさんが、様々な困難にもかかわらず未来はかならずよくなると希望をいただき、これらの四年間の学びの時がこころの底から充実したものであると実感できるのであれば、未来は明るいとは私は

信じることができます。未来はみなさん一人ひとりの双肩にかかっています。

二十世紀は物理学の時代でした。その象徴が、核エネルギーの解放であり、宇宙開発でした。その二十世紀が終りにさしかかったころ、スコットランドで六歳の羊の体細胞からクローン羊が誕生しました。技術的にきわめて困難と考えられてきた哺乳類でのクローン生命の誕生は、人類（ヒト）でもクローンが可能であることを示したもので、二十一世紀がまさに生命科学の世紀であることを如実に示す画期的な事件となりました。一九九六年六月に誕生し、

今年の二月、ふつうの羊の寿命の約半分の短い生命を終えて死亡した、生命史上初のクローン羊「ドリー」は、科学史上だけではなく歴史上の「事件」として今後も様々な論議を呼ぶことになるはずですよ。クローン問題に対しては、倫理上、政治上、

世界各国において多くの真剣な議論がなされており、まだだれもがそれに対する「正解」を得てはいません。クローン問題だけではありません。地球温暖化、エネルギー、環境、臓器移植、ゲノム解読、胚性幹細胞等々、人類の生存に密接にかかわるこうした先端的な科学技術のすべてが、正解のない問題ばかりですよ。

みなさんは今、正解のない学びの世界に入ろうとしています。どの本を見ても正解がのっていないとか、だれも正解を教えてください、ということではありません。だれもが正解を知らないのです。そのような世界の入り口に立ったとき、だれもが不安におののくはずですよ。その不安を払拭するには、懸命に学ぶこと以外、道はありません。

繰り返しになりますが、私は、みなさんが人類の未来を見据えて真摯な態度で学ぶ姿にこそ、未来を見ることが出来ます。